

昔むかし、あるところに、おかあさんと男の子がくらししていました。男の子はやさしい子で、みんなから愛あいされていました。

ある日、男の子がいました。

「おかあさん。ほかの子には、みんなおばあちゃんがいるのに、ぼくだけいない。つまらないなあ」

おかあさんは、

「じゃあ、なんとかしておばあちゃんを見つけようね」と答えました。

ある日のこと、男の子のうちの前に、まずしい身なりのおばあさんが物ごいにやって来ました。おばあさんは、やつれはてていました。男の子は、おばあさんを見ると、

「ねえ、ぼくのおばあちゃんになってくれませんか」とたのみました。そして、おかあさんのところに行つて、

「うちの前に、おばあさんが物ごいに来てるよ。ぼく、あの人におばあちゃんになってもらうんだ」といいました。

おかあさんは、すぐに賛成さんせいして、そのおばあさんを家の中へまねきいれました。おばあさんのからだはとてもよごれていて、のみやしらみがいっぱいいたかっています。

「ねえ、おかあさん。おばあちゃんをあらってあげようよ」

ふたりは、おばあさんのからだを、きれいにあらってあげました。そして、着物についたのみやしらみを、いっぴきいっぴきていねいに取っては、つぼの中に投げ入れました。つぼがいっぱいになると、おばあさんは、

「そのつぼをすててはいけないよ。庭にうめておくんだ。そして、いつか洪水こうずいが来たときに、ほりだしてごらん」といいました。

「洪水だつて。いつ来るの」と、男の子はききました。

「監獄かんごくの門の前にある、ふたつの石の獅子\*ししの目が赤くなったら、洪水がやって来るしるしだよ」

男の子はすぐに監獄の前の石の獅子を見に走っていきました。けれど、その目はまだ赤くなっていませんでした。おばあさんは男の子に、

「木で小さな船を作って、はこに入れてしまっておきなさい」といいました。男の子はいわれたとおりにしました。

それからというもの、男の子は毎日、監獄の前に行って石の獅子の目が赤くなっているか、たしかめました。

ある日のこと、男の子が、にわとり売りの前を通りかかると、にわとり売りが、

「おまえ、どうして、毎日毎日、石の獅子のところへ通うんだい」とききました。男の子は、

「あの獅子の目が赤くなったら、洪水がやって来るんだよ」と答えました。にわとり売りは大わらいして、

「そんなこと、しんじられない」といって、本気にしませんでした。

つぎの日の朝早く、にわとり売りは、石の獅子の両方の目に、にわたりの血をぬりつけておきました。しばらくして、男の子がやって来ました。そして、石の獅子の目が赤くなっているのを見ると、大いそぎで家にかかけもどりました。

おばあさんは、

「さあ、庭にうめてあるつぼを、いそいでほりだしておいで。それから、木で作った船をはこから出さない」といいました。

男の子とおかあさんが、庭のつぼをほりだしてみると、なんと、その中に、美しい真珠しんじゆがぎっしりつまっているではありませんか。小さな木の船は、はこから出したとたん、またたくまに大きくなって、ほんとうの船になりました。

おばあさんはいいました。

「ふたりとも、そのつぼをモ持って船に乗りなさい。じきに洪水が来るから。動物たちが水に流されてきたら、みんな船に助けあげてやるんだよ。けれど、黒い髪かみをした人間は、けっして助けるんじゃないよ」

男の子とおかあさんは、つぼをかかえて船に乗りこみました。すると、おばあさんは、あつというまにすがたを消しました。

ちようどそのとき、にわかにな雨がふりはじめました。雨はしだいにはげしくなり、天から地面にたたきつけるように、すさまじいいきおいでふってきました。まるで滝たきのようです。あたりはみるみるうちに水につかっしまいました。

やがて、むこうから、犬がいつびき流されてきました。男の子とおかあさんは、すぐ

に犬を船に助けあげてやりました。

しばらくすると、こんどは、ねずみの家族が流されてきました。ねずみたちはこわがって、ちゅうちゅう鳴いていました。男の子とおかあさんは、ねずみたちを船に助けあげてやりました。

水は、もう屋根まで来ています。

一軒いっけんの家の屋根に、ねこがうずくまって、にやおにやお鳴いていました。そのねこも助けてやりました。

水はますますふえて、木のこずえまでつかりはじめました。

一本の木のこずえで、からすが羽をばたばたさせながら、かあかあ大声で鳴いていました。そのからすも、船に助けてやりました。

しばらくすると、ミツバチのむれがやって来ました。雨にびつしよりぬれてほとんどぶことができません。男の子とおかあさんは、みつばちたちも船に入れてやりました。

やがて、黒い髪をした男の人が、波にもまれながら流されてきました。

「おかあさん。あの人も助けてあげよう」

男の子がいうと、おかあさんは、

「でも、おばあちゃんがいったじやないの。黒い髪をした人間はけっして助けてはいけないって」といいました。男の子は、それでも、

「ねえ、助けてあげようよ。あんなふうに水の中を流されていくなんて、見ていられないよ」といいました。ふたりは、その男の人も助けてやりました。

やがて、水は引きはじめました。そして、ついにみんなは船をおりました。動物たち

や男は、わかれをつけて、うちに帰っていきました。ひとりのこらずおると、船はたちまち小さくなってもとの大きさにもどりました。男の子は、それをまたはこにしまいました。

さて、助けてもらった男は、男の子が持っていた真珠に目をつけて、横取りしようと考えました。そして、裁判官さいばんかんのところに行って、うそをならべたて、ふたりをうったえました。ふたりはとらえられて、ろうやに放りこまれてしまいました。

まもなく、ねずみたちがやって来て、ろうやのかべをかじって、あなを開けました。そのあなを通って、犬が肉を運んできました。ねこは、おまんじゅうを持ってきました。おかげで、男の子とおかあさんは、少しもひもじい思いをしなくてすみました。

からすは、どこかへとんでいったかと思うと、手紙を一通くわえてきて、裁判官にわたしました。それは神さまからの手紙でした。中にはこう書かれていました。

「かつてわたしは、物ごいのばあさんのすがたで人間の世界を歩きまわったことがある。そのとき、ひとりの少年と母親が、わたしを家にむかえいれ、少年は、わたしをほんとうの祖母そぼのようにあつかってくれた。少しもいやがらずに、わたしのからだのよごれをあらい落してくれたのだ。わたしは、この親子が住んでいた罪深い町つみを洪水でおし流したが、この親子だけは助けてやったのだ。裁判官よ。このふたりをただちに自由にしてやるのだ。さもなければ、わたしはおまえに不幸ふこうをもたらすであろう」

これを読むと、裁判官は、すぐに男の子とおかあさんをよんで、これまでのことをたずねました。ふたりはすべてを話してきかせました。それは、神さまの手紙に書かれてあったとおりでした。裁判官はすぐにふたりを自由にし、男をきびしく罰ばつしました。

やがて、男の子はりっぱな若者わかものになりました。

あるとき、若者は大きな町をおとずれました。その日は、ちょうどおひめさまがけっこんの相手をお決めになるといふ日で、たくさんの人が集まっていました。

おひめさまは、ボールで顔をかくしてかごに乗り、たくさんと同じようなかごにまじって、市場のある大きな広場を通っていくところでした。どのかごにも、ボールで顔をかくしたむすめが乗っていました。おひめさまの乗っているかごを当てた者が、おひめさまとけっこんでできることになっていました。

若者は、かごの行列を見ているうちに、まんなかのかごのまわりを、みつばちのむれが、むらがつてとんでいるのに気づきました。若者は、そのかごに近づいて、

「おひめさまは、ここにいらつしやいますね」といいました。たしかに、おひめさまは、そのかごに乗っていました。

それから、盛大せいたいなけっこん式が行われ、ふたりは一生楽しく幸せにぐらししました。

獅子 ライオン。石の獅子は狛犬いほいぬのようなもの

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界のメルヒェン図書館12』小澤俊夫訳／ぎょうせい